

令和5年度 第1回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 令和5年4月26日(水) 19:00~21:00

◆開催場所 東近江市役所 313 会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾 昌峰、辻 薫、小嶋 一浩、綾 康典

小島 秋彦、富田 由美子、藤澤 彰祐、藤 一道、奥田 新悟

若林 理恵、笠原 健司、水谷 友彦、小島 淳司、朝比奈 遥

(欠席：園田 由未子)

市民部長 坂田、市民部次長 中江、まちづくり協働課 嶋村、岡崎、西川、松居(事務局)

◆議題

(1) 今年度の検討事項

(2) 市民協働推進計画の見直しに向けて

【事務局から開会のあいさつ】

- ・司会進行は課長
- ・市民部長あいさつ

【委員長あいさつ】

<委員長>

本日もよろしくお願いいたします。今年度から事務局が新しい体制になったということですが、我々委員のやることは変わりません。私自身は、今年度地元自治会の役員になりました。周りの役員からは、「コロナ禍のうちに役員をした方がいいよ。」と言われたのですが、今年度から自治会の事業も再開するようです。自治会活動については、高齢化等でコミュニティが維持できないという声も聞こえます。お祭り一つとっても、「子どものために・・・」とは言いますが、肝心の子どもも自治会内にいない状態です。

近年では手段が目的化しており、「自治」を根底に置いています。一人一人の可能性を引き延ばすのが理想的と考えます。

さて、今回の委員会から計画の見直しに着手します。前回委員から提言いただいた、計画年数については、一旦10年のままで考えています。委員の皆さんから忌憚のない意見をいただき、まとめ上げ、協力していければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【議題】

(1) 今年度の検討事項【資料1】

<事務局>

今年度の委員会日程について、資料をもとに、説明を行う。前半については、市民協働推

進委員計画の見直しを中心に月1回会議を開催する。9月には計画の素案ができるように話し合いを進めていく。また、先ほど委員長の予定を確認したため、この場で第4回から第6回の委員会の日程もお伝えする。第4回7月20日(木)、第5回8月28日(月)第6回9月19日(火)である。

後半は、わがまち協働大賞の選考が中心となる。1次選考を通過した事業のヒアリングについては、今年度も委員の皆さんに御協力をお願いしたい。表彰式については、2月下旬から3月上旬の予定である。

→委員からの意見、質問等なし。

## (2) 市民協働推進計画の見直しに向けて【資料2】【資料3】

### <事務局>

資料2については、現行の施策と見直し案となる施策をあげている。資料3については、資料2の見直し案にそって、実際に市民協働推進計画に落とし込んだものである。また、前回の委員会の資料2を机にお配りさせていただいた。これは、前回までのグループワークで出た意見をまとめたものである。今後、委員会で参考にすることが多々あると思うので、毎回こちらの資料も持参してほしい。

### <委員長>

それでは、資料3は少しまとまり過ぎているかもしれないので、委員の皆さんで「計画に書かれた事項の順番を変えた方がいい。」や「もう少し言葉を足しては。」など議論いただきたい。ここからは、自由に意見を出す時間なので、どんどん意見を出してほしい。

### <委員>

地域担当職員について、純増した人数はどれくらいなのか。退職した人数も分かるものなのか。

### <事務局>

退職者は、数としてはあまりいない。また、各支所には退職した職員が再雇用という形で参事員として配属されている。地域と行政のパイプ役という役割である。

### <委員>

永源寺の子育て広場の職員は、行政の元職員で、私たちよりもコネクションが強い。

### <委員長>

市のOBがどう支えたらよいだろうか。参事員のような再雇用の職員のこと、計画に書

いてもよいかもしれない。

<委員>

今の話の続きであるが、若者のまちづくり参画だけではなく、リタイヤした人も計画に入れてはどうか。例えば私の入っている自治会の例であるが、自治会のルールでは75歳以上は役を免除するとなっていて、実際その人たちに頼らないとやっていけないのでルールの見直しの話が出ていた。

<委員長>

OBとしての背景がある人はよいが、そうではない人も多い。

<委員>

計画の見直しについての全体的なことであるが、私のいるまちづくり協議会では、まちづくり計画の改訂を控えている。今は計画の方針を考えているところだが、「中学生が読んでも分かるように。」という話が出ている。今回資料3に目を通して、もう少し分かりやすくなればという印象を持った。

<委員長>

大切なことである。これから計画の見直しに取り組む上で、心がけていくことが必要である。

<委員>

「地域担当職員制度の推進」の中で事業例としてあげられている、ジョブ型地域担当職員制度というのは、どういう制度なのか。

<事務局>

地域担当職員は、毎年7月が切り替えの時期である。これまでは毎年公募していたが、まちづくり協議会の要望を元に、広報誌など地域担当職員が持つ得意分野でのマッチングをはかるのがジョブ型地域担当職員制度である。今までは、会議に出席しても役員がいるため萎縮してなかなか発言できないということもあったかと思う。

<委員>

時々聞く話である。「デザインが得意」、「広報の編集が得意」などは、地区に関係なく生かせるのではないか。

<委員長>

まちづくりに、自分たちが持っている能力を生かすのもよいのではないか。これをやった方がよいと思っていることがある。それは、職員の研修を地域に開くのも良いのではないかということである。行政向けの研修をする機会があるのだが、地域の人が聞いても参考になると思っている。一般の人が受講すると、けっこうお金がかかることがある。合同研修や交流会など、もう少し踏み込んでよいのではないか。最初から全ての人に開放すると大変なので、最初はにじまちサポーターズに登録している人や、商工会議所の会員として絞っても面白いかもしれない。

<委員>

地域担当職員制度について、市職員が会議に出やすい雰囲気になればよいと思う。

<委員長>

こうやったらもっと地域担当職員制度は良くなるのにというのはあるか。

<事務局>

一生懸命やっている職員にはインセンティブをあげたいという気持ちはある。ただ、制度自体に反対の声もある。地域担当職員にならない理由として、プライベートを優先したいという意見も多い。

<委員長>

市民協働推進計画の中では、地域担当職員の数を増やしていくというメッセージを伝えただ方がいいのか。市職員のうち20%か30%か、その辺りは分からないが・・・。

<委員>

二点聞きたいことがある。地域担当職員にならなかった場合、職員としての評価は下がるのか。また、この制度は、一般市民は知っているものなのか。

<事務局>

地域担当職員にならなかった場合でも、評価は下がらない。また、現状として一般市民は地域担当職員制度を知らないと思う。

<委員>

地域担当職員制度は、市民に知ってもらう制度でなくてよいものなのか。一部の人しか知らない存在よりも、まちづくりを知ってもらうために誰もが知る存在の方が良いのではないだろうか。

<委員長>

制度としてどうするかを議論する余地がある。「まちづくりに参画しやすい」というのは、後ほど検討材料になる。いわゆる副業で申請したら出来るような制度とか・・・。

<委員>

地域教育ができると素敵だと思う。清流会から学ぶとか、地域の特色にあわせて学べるとよいと思った。「自分が地域を教えるのだ。」という意識につながるのではないか。

<委員長>

ボランティアコーディネーター＝つなぐ人の存在が「人を育む」として重要視していかないといけない。

<委員>

違う話かもしれないが、前回の委員会で出た「スマイルネットの活用ができていない」というのがどうなっていくのか。八日市地区はスマイルネットの普及率が 50%いかない。無理やり見せるとか、待つのではなく見せつけるくらいの仕組みを行政がやらないと思うので、考えてもらいたい。

<委員長>

まちづくりネット東近江で枠を持っているのか。

<委員>

前は枠を持っていたが、今は YouTube で発信できるので、枠はない。今は、e-おうみ NOW!! の取材先のコーディネートのみになっている。

<委員>

YouTube もあるけど、生かし切れていない気がする。

<委員長>

まちにとってはオフィシャルに流れるのは重要なことである。

<委員>

以前、園に取材が来たが、スマイルネットに加入していないのでそもそも放送を見ることができなかった。結局、3,000 円でブルーレイを購入した。

<委員>

まちづくりネット東近江は、自分でチャンネルを持って発信している。登録者数は市のチャンネルよりも多い。

<委員長>

動画という手段が、紙媒体より伝わる時代になっている。紙で発信しても、読んでもらえないことが多い。

<事務局>

若い人が入っていくのは抵抗がある。

<委員長>

大学生もそうだが、テーマを与えると、それなりに色々な視点で探してくる。

<委員>

計画の中では中学生がクローズアップされているが、成人式を迎えた人が関心を持ってもらえるような何かができないかと思った。中学生は、高校、大学と進んでいくとまちから少し離れることが多い。例えば、企業の人権やまちづくり担当が地元になるとよいと思う。

<委員長>

そういう事業所をモデルにできればよい。

<委員>

中学生に向けた企業説明会で、大人たちが子どもに生き生きと説明していたのを見た。引きこもりの人たちの居場所づくり、ごみ拾いをしながら観光や、ジョブ体験など。

<委員長>

企業の先にいる市民とどうつながるかである。寄附だけで終わってしまいがちだが、巻き込む方法を考えていかないといけない。

<委員>

以前いた市では、子育て応援企業の登録制度があった。就活する時にもハローワークに登録されていることが分かるマークが表示されていた。

<委員>

生活している中で、「誰のためにしていることなのか。」と疑問に思うことがある。点字ブロック上に街路樹があったり、マンホールがあったりと。そういった企画をする時に、当事

者が入っていればよいのと思う。

<委員長>

ラウンドテーブル運営委員会をどう位置づけるのかということも検討材料の一つである。当事者が入っていることが政策形成につながっていく。

<委員>

若者のまちづくりについて、若者が率先して行っている。先日「あかね結（ゆい）フェスタ」が開催され、20代から40代の人たちがマルシェを開いたが、公園の駐車場がいっぱいになるほどであった。公園の担当課は当日来ていたが、まちづくり協働課はフェスタのことを知っていたのだろうか。情報発信が下手ということもあるかもしれないが、受ける側も下手と感じている。まちの中でされている活動というのは、実際は沢山ある。子ども支援ネットワークについても、市に担当課が無かったため、社会福祉協議会に相談した。行政より民間の方が、一歩進んでいる。情報発信能力を、市も身につけてほしい。

<委員長>

「知っていたらそのイベントに行っていたのに・・・。」ということもある。場所の使用申請を受けた側がどのように連携を行っていくかである。

<委員>

計画の中にある、「部局横断的な取組の推進」について、内部の話なので、外部の人には分からない。主語があるときちんとした施策になるのではないかと思った。

<委員長>

これも、ラウンドテーブルをどう位置づけるかという話につながると思う。

<委員>

色々な部局で計画を持っている。

<委員長>

私は福知山市の行政改革推進委員会の委員長をやっているが、施策レビューも委員会の中で行っている。

<委員>

先日、スマート農業の説明会が市のホームページに載っていた。農業の担い手がいなくても、テクノロジーで担うというものである一方、移住者も募るというものである。テクノロ

ジーが発達すると、移住者がどうなっていくのだろうかという思いはある。

<委員長>

ありがとうございます。他、まだ発言していない人、いかがか。

<委員>

計画について、固いイメージを感じている。まちづくりに無関心な人にどう興味を持ってもらえるかだと思う。

<委員>

わたしはたまたま、まちづくりに関心があったのでこの分野に踏み込んでいるが、同世代はそもそもどういうものが「まちづくり」になるのか分かっていないと思う。そのことについても計画に取り込んでいければと思った。

<委員>

以前、意見のまとめの中に、わがまち協働大賞の中止という意見があった。先月表彰式があったが、受賞者はとても喜んでおられた。もっとちゃんとしたステージでできればと思った。わがまち協働大賞をやめるのではなく、続けてほしい。

<委員長>

ステージについては成人式と一緒にやるとか、違う式典と抱き合わせもありではないか。わがまち協働大賞を中止するのもありだし、位置づけし直して若者などへの突破口とするのもありである。

<委員>

私は逆の立場になったことがある。東近江市の近江匠人（しょうにん）になったことがあるが、受賞した証であるプレートをお店に置けたり、証明書があつたりすれば、受賞後も自慢できると思う。

<事務局>

- ・次回令和5年度第2回市民協働推進委員会：5月26日（金）午後7時から
- ・今日の意見をまとめた資料を、後日送付する。

午後9時会議終了